

# 近世史料館開館記念展

## 「百万石への道」

### 展示案内

平成11年11月15日～12年1月

1. 1階 第1展示室 城下図と道中図
2. 1階 第2展示室 百万石への道
3. 2階 展示室 和紙と補修

金沢市立玉川図書館 近世史料館

## 〈百万石への道〉

### 1. 荒子城址取調帳 (16.12-17)

前田利家は、天文7年(1538)の誕生が通説となっているが、6年説もある。この史料は、利家誕生の地、尾張国愛知郡荒子村付近(現在の名古屋市中川区荒子町)に位置した荒子城址を調査した記録の写しである。

### 2. 姉川・築ヶ瀬合戦之図 (097.6-1)

利家が戦った2つの合戦における陣取りの様子をあらわした絵図である。

姉川は、現在の滋賀県東浅井郡に位置し、伊吹山を発源とし琵琶湖に注いでいる。元亀元年(1570)織田信長が浅井長政、朝倉義景を破ったこの戦に信長方として参戦した利家は、図中に名前を見ることはできないが、浅井助七郎の首を挙げるなどの功労があったことが加賀藩史料に記されている。

梁ヶ瀬は、現在の滋賀県伊香郡余呉町。賤ヶ岳の戦い(6参照)に際し、柴田勝家が布陣した地である。勝家側近として別所山に布陣する利家(又左衛門)父子の名前を見ることができる。

### 3. 犬千代丸君之像 (K7-86)

時代は前後するが、この図は、永禄3年(1560)5月、織田信長が今川義元を倒した桶狭間の戦いに、信長軍として参戦した利家凱旋の姿を表したものであると伝えられる。もともとは加賀藩御用絵師であった岸駒(がんく)の原画があったとされ、その写しが各所に現存している。

### 4. 三州長篠合戦之図 (098.6-28)

天正3年(1575)、長篠(現在の愛知県南設楽郡鳳来町)において織田・徳川軍が武田勝頼の侵攻による戦いの陣取り図である。長篠の戦いでは、厳密には長篠城の戦いと設楽ヶ原の戦いがあったが、この図ではその布陣の様子が描かれている。利家は、鉄砲隊を率いて、右足を負傷しつつも活躍したという逸話が残されている。

鉄砲隊による戦法で、当時、無敵と言われた武田騎馬隊に壊滅的な打撃を与えた合戦史に残る戦いであったと言える。

### 5. 魚津城絵図 (13.0-98)

天正10年(1582)、着々と北陸への侵攻を進めてきた織田軍が、上杉勢の一掃を図り、利家、柴田、佐々らの連合軍が魚津城を取り囲んだ。城主・中条景泰は驚異的ともいえる八十日あまりの籠城に耐えたが、ついには陥落した。

これは現在では城郭の形跡も残っていない魚津城の位置図である。

## 6. 江州志津ヶ嶽地理略図 (22.3-32)

天正11年(1583)4月、信長の没後、その後継をめぐる対立した柴田勝家と羽柴秀吉が近江賤ヶ岳で戦を交えた。利家は当初、北陸地方の統括として君臨していた柴田軍の与力として参戦したが、後に羽柴軍につき、勝家の本拠地・北庄(現福井市)攻撃の先鋒となった。図には両軍の大名の名前を見ることができる。

## 7. 本封叙次考 (16.20-1)

天文20年(1551)、利家が信長より初めて50貫の領地を得てから以降の所領の領有状況を文化10年(1813)までにわたって記載したものである。

著者の富田景周は、加賀藩士として国史及び加賀藩の歴史地理にも精通し、このほか多数の著書を残している。

## 8. 誓文日記 (16.82-139)

前田氏の家臣であった可児才蔵が、自ら参戦した合戦等について記した戦記。末森合戦、関東征伐、筑紫名護屋出陣、関ヶ原の合戦などについて触れられている。

## 9. 末森合戦絵図 (16.51-16)

天正12年(1584)当時、織田信雄・徳川家康方であった佐々成政は、前田方の朝日山(現金沢市加賀朝日町)の侵攻に失敗したのち、末森城(押水町)への侵攻を図った。しかし、利家が即座に出陣し勝利をおさめ、佐々軍は敗退した。

図中に、当時の地形に引き合わせて違いがある旨の注記がある。

## 10. 肥前名古屋城陣取図 (16.84-190)

文禄元年(1592)、秀吉が朝鮮への出兵に際し築いた城郭の図である。

利家は一番に出陣し、家康と共に秀吉の側近として、秀吉不在時等の城を守った。

## 11. 大聖寺戦陣取図 (大1225)

慶長5年(1600)、関ヶ原の合戦と時を同じくして家康方についた利長は、豊臣方の石田三成に味方する大聖寺城主・山口玄蕃宗永、右京父子を攻めた。利長の使者による降伏の勧めを拒否し、激しく応戦した山口軍であったが、8月2日前田軍の猛攻に敗れ落城した。

## 12. 浅井礪合戦に関する図 (16.51-41)

利長軍は大聖寺城での戦いのあと、そのまま越前に踏み入ったが、すぐに大聖寺に引き返した。その帰路、山口父子と同じく三成方についた小松城主・丹羽長重軍の急襲を受けた。

この図は、戦の場所となった浅井礪と小松城など周辺の様子を表している。

### 13. 利家卿遺書 (16.17-11)

内題は「大納言様ヨリ芳春院様御右筆ニて備前様へ被仰置候条々」で利家が夫人に代筆させた利長宛の遺書である。成立は慶長4年(1599)とされ、内容は10ヶ条からなり、利長、利政の領地や兵士の配分、前田家存続のための心構え、家臣の処遇など委細に及んでいる。

## 〈参勤交代と道中図〉

### 14. 中仙道山川駅路之図 (16.78-46)

藩主が江戸から中山道を使い北陸に入ることは、綱紀が享保2年に、斉泰が嘉永元年にそれぞれ行なった記録もあり、特別に珍しいことではなかった。大宮、高崎を経て信州に入り、関ヶ原から米原、長浜などを経て越中、加賀に至る行程は総距離百六十里あまりと公称されていた。

街道沿いの見聞記事なども記されている。

### 15. 江戸至金沢図 (16.78-37)

東海道経由での江戸ー金沢間の道中絵図。名所、旧跡を丁寧な絵図とともに解説している。

### 16. 金沢板橋間駅々里程表 (16.78-47)

有沢永貞の作図を寛政11年(1799)に田辺政巳が校正したもの。金沢ー板橋間の各宿駅を方眼状に配置し、それぞれの距離を明細に記載、翌日の宿泊地までの行程計算の便に備えたものである。有沢永貞ははじめ武田氏の軍法を学び、その後、兵学に町見術(測量法)の必要性を知り習得。その著書は兵法をはじめ、歴史、軍記と多岐にわたる。正徳5年11月没。

### 17. 江戸より金沢までの道しるべ (16.78-43)

江戸より中山道、新井を経て金沢までの下道中の道しるべと道中の諸事聞書である。城、寺社などを朱色の記号を使ってあらわし解説するなどの工夫が見られる。

### 18. 下通山川駅路分間之図 (16.78-41)

宿場間の本馬駄賃を付している。題名を里程標柱に仕立てたり、駄賃を帳面に書きあらわすなど、デザイン、レイアウト、彩色にも凝った仕様がなされており興味深い。

19. 金沢江戸間山川記 (16.78-38)

金沢から江戸(下街道)までの地名、距離、山川、名所旧跡などを記している、明和2年(1765)の記述がある。

20. 下通山川駅路之図 (16.78-40)

各宿駅間の距離を朱色で記している。

## 〈さまざまな和紙〉

1. 和紙の原料、紙以前の書写材料
2. 変わった原料で漉いた紙
3. 世界の紙
4. 破り継ぎ料紙(岡山県岡山市)
5. 紺紙金泥経(福井県今立町)
6. 漉き絵-梅松図
7. 金唐革紙
8. 越中八尾紙-三楯(富山県八尾町)
9. 五筒傘紙(富山県平村)
10. 加賀奉書(金沢市二俣町)
11. 二俣箔打紙(金沢市二俣町)
12. 田島紙(金沢市田島町)
13. 中島箔打紙(石川県川北町)
14. 相滝紙(石川県鳥越村)
15. 越前鳥の子紙(福井県今立町)
16. 越前奉書(福井県今立町)
17. 雲肌麻紙(福井県今立町)
18. 若狭紙(福井県小浜市)
19. 本美濃紙(岐阜県美濃市)
20. 名塩金箔打紙(兵庫県西宮市)
21. 吉野紙(奈良県吉野町)
22. 吉野森下紙(奈良県吉野町)
23. 高野紙(和歌山県九度山町)
24. 土佐西の内紙(高知県佐川町)
25. 多色雲竜紙(金沢市二俣町)
26. 多色雲竜紙(金沢市二俣町)
27. 雲竜紙-緑色(富山県八尾町)
28. 雲竜紙-茶色(富山県八尾町)
29. 雲竜紙-紅殻色(富山県八尾町)
30. 雲竜紙-紺色(富山県八尾町)
31. 越前雲竜紙-草色(福井県今立町)
32. 越前雲竜紙-桃色(福井県今立町)
33. 雁皮花大礼紙-淡黄色(福井県今立町)
34. 春木紙(富山県八尾町)
35. 雲芸紙-未晒し(富山県八尾町)
36. 雲芸紙-黄土色(富山県八尾町)
37. 金箔打紙(石川県金沢市)
38. 銀洋箔打紙(石川県金沢市)
39. アルミ箔打紙(石川県金沢市)
40. 杉皮紙(石川県輪島市)
41. 櫛皮入り紙(石川県輪島市)

アテ



# 加賀藩略年表

1

天正九年(一五八一)

前田利家、能登一国に封じられる。

十年(一五八二)

能登に檢地行なわれる。本能寺の変。石動山の合戦。一向一揆最終的に滅ぶ。

十一年(一五八三)

賤ヶ岳の合戦。利家、金沢に入城、石川・河北郡を加増。

十二年(一五八四)

越中の佐々成政来攻。末森の合戦。

十三年(一五八五)

秀吉軍、佐々成政を征伐。前田利長、越中の内砺波・射水・婦負三郡を領知。

十八年(一五九〇)

利家、小田原征伐出陣。奥州檢地の惣奉行を勤める。

文禄元年(一五九二)

利家、肥前名護屋へ出陣。

二年(一五九三)

前田利政、能登一国を領知。

四年(一五九五)

利家、近江国今津・弘川村を加えられ、越中新川郡を領知。

慶長四年(一五九九)

利家没。家康、加賀征伐を企て、和睦。

五年(一六〇〇)

芳春院江戸に人質となる。利長、大聖寺城を攻略。加賀南半合せて百二十万石を領有。

六年(一六〇一)

將軍秀忠嫁来嫁。

九年(一六〇四)

十村制度創設、越中三郡總檢地。

十年(一六〇五)

利長、隱居領十九万石で富山城(十四年高岡城)に移る。利常相統。

十一年(一六〇六)

越中の土方領一万石を能登に替え地(貞享元年幕府領、享保七年加賀藩御預となる)。

十五年(一六一〇)

利長十万石分を返還、遺戒を示す。利常、本多政重を召し抱える。

十九年(一六一四)

利長死去。キリシタンの客將高山右近ら追放される。大坂冬の陣出陣。

元和元年(一六一五)

大坂夏の陣出陣、豊臣氏亡ぶ。

二年(一六一六)

加賀・能登總檢地(元和六年)。金沢の町割り。七木の制。

寛永四年(一六二七)

奥能登に塩専売制開始。

八年(一六三一)

金沢大火で城焼失。翌年辰巳用水を開削。幕府が前田氏に嫌疑をかけ、弁明して済む。

十二年(一六三五)

金沢大火。町割りを改める。

十六年(一六三九)

利常隠居し、二十二万五千石で小松城に移り、光高が本藩八十万石をつぎ、

富山藩十万石、大聖寺藩七万石を分立。

慶安四年(一六五一)

利常、改作仕法に着手(明暦二年)。改作奉行設置。

万治二年(一六五九)

諸奉行、諸役所の職務規程を定める。

三年(一六六〇)

木下順庵来任(天和二年)。

寛文六年(一六六六)

家臣長氏の家中で内紛(浦野事件)起る(寛文八年)。

八年(一六六八)

白山麓十八ヵ村が幕府領となる。

十年(一六七〇)

村々へ村御印を下附(寛文の村御印)。藩營救恤施設を置く。

十二年(一六七二)

室鳩巢来任。(正徳元年)。

天和三年(一六八三)

諸士の職制を定める。

貞享二年(一六八五)

綱紀、東寺へ百合の文書箱を寄進。

三年(一六八六)

職制を改正し、重臣を年寄、家老、若年寄と定める。

元禄三年(一六九〇)

老臣八家の制を定める。新田裁許を設置。

六年(一六九三)

切高仕法を施行。稻生若水来任し、十年より「庶物類纂」の編纂に着手。

# 加賀藩略年表

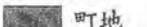
2

- 正徳二年(一七一二) 石川郡、越中射水郡で百姓一揆。大聖寺藩でも大一揆起る。
- 享保九年(一七二四) 吉徳相統。儉約策と農政の古格復帰仕法を施行。
- 延享二年(一七四五) 吉徳の死去で大槻朝元弾劾され失脚(加賀騒動)。
- 宝暦五年(一七五五) 銀札発行で金融閉塞し物価騰貴。翌年金沢等で暴動起り銀札停止。
- 九年(一七五九) 金沢一万五千軒延焼の大火。金沢城焼失。
- 安永五年(一七七六) 能美郡で山方仕法替え。
- 七年(一七七八) はじめて産物方を設置。
- 天明四年(一七八四) 前年の凶作で米価高騰。宮腰・輪島で米騒動。疫病流行。物乞い横行。
- 五年(一七八五) 隠居重教が勝手方を親裁して天明の御改法を実施(天明六年)。
- 寛政四年(一七九二) 藩校明倫堂。経武館を創設。
- 十一年(一七九九) 金沢に地震。城内にも被害出る。
- 享和元年(一八〇一) 高方・引免詮議。新聞の仕法(享和の仕法)。能登で山方仕法替え。
- 文化五年(一八〇八) 金沢城二の丸御殿焼失。
- 六年(一八〇九) 本多利明来任。
- 八年(一八一二) 改作方復古の仕法を施行。
- 文政二年(一八一九) 十村断獄。御国民成立仕法で調達銀、株立など実施。
- 三年(一八二〇) 金沢に遊廓(天保二年。慶応三年再置)を許可。
- 四年(一八二二) 郡方仕法により十村制度を廃止(天保十年復元)。
- 五年(一八二二) 竹沢御殿造営。庭園を「兼六園」と命名。
- 七年(一八二四) 隠居奇広、竹沢御殿に教諭局を置く(正月―七月)。
- 天保元年(一八三〇) 金沢分間絵図成る。
- 四年(一八三三) この年および七年領内凶作で米価高騰、飢饉、米騒動起る。
- 六年(一八三五) 加越能三州地固成る。
- 八年(一八三七) 天保改革に着手(天保十四年)。
- 嘉永五年(一八五二) 銭屋五兵衛疑獄事件起る。
- 安政五年(一八五八) 領内に地震。米価高騰で金沢町民が泣訴。領内三十ヵ所ほどで騒動。
- この年、翌年コレラ流行。
- 文久二年(一八六二) 領内に麻疹。コレラ流行。
- 元治元年(一八六四) 禁門の変で嗣子慶寧謹慎。藩内尊王攘夷派弾圧される。
- 慶応二年(一八六六) 砲術をすべて西洋流に改め、軍制改革を行う。
- 三年(一八六七) 領内割拠を国是とする。卯辰山開発に着手。
- 明治元年(一八六八) 鳥羽・伏見の戦いに徳川方へ援軍。転じて会津征討に従軍。
- 二年(一八六九) 版籍奉還で慶寧、金沢藩知事となる。執政本多政均暗殺される。
- 四年(一八七二) 廃藩置県で慶寧、東京へ移住。金沢県となる。

# 加賀国金沢之絵図



寛文8年(1668)  
 金沢市立玉川図書館(16.60-86)  
 362×344cm

 武家地	 寺社地
 町地	 藩施設

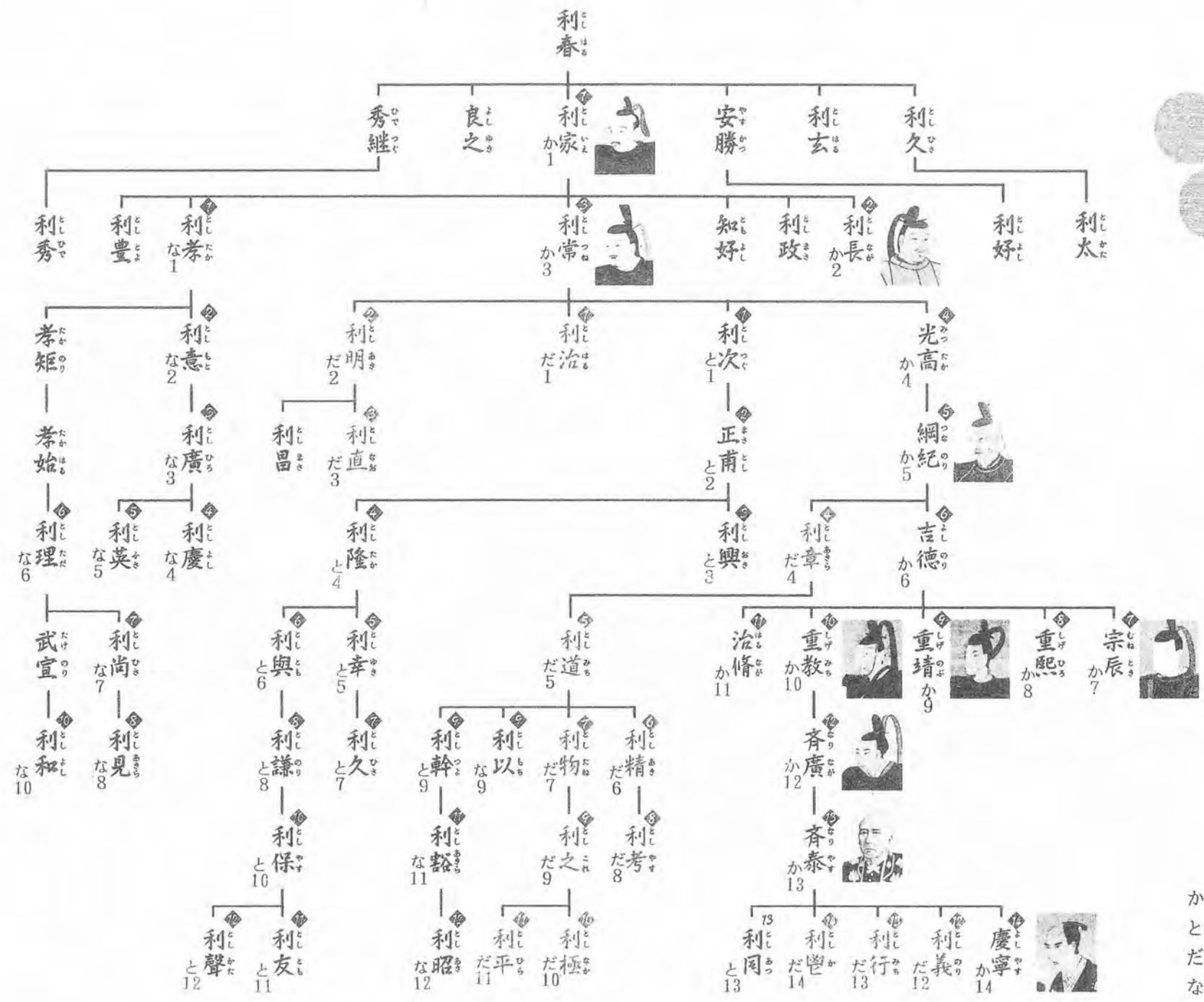
『加賀国金沢之絵図』は寛文8年(1668)に幕府に提出したものの写しで、金沢図の中では特例的に城郭部と城下部とが一体に描かれた図である。

彩色は、河川・濠はあさぎ(水色)、土居はもえぎ(緑色)、道は山吹(黄色)で表され、図法的には平面図を基本としているが、城郭内の石垣・塀・櫓等の他、城内の東照宮とその別当寺及び大猷院(徳川家光)仏殿、自然地形としての城下の崖と東方の卯辰山が立体的に図示されている。

表記では、城下の武士地と町屋の区別を基本として、固有名詞と数字からなっている。数字は軍事情報の最も具体的なもので、城郭内の各廓の規模・濠の幅及び水深・塀と石垣の長さ高さ、城下においても河川の幅と水深・橋の幅と長さ・道の距離等が表示されている。固有名詞では、寺社名が特記されており、これらの寺社は藩主前田家の菩提寺・祈祷寺でもあり、領内各宗派の支配的寺社でもある。この他、周辺部の「堅田」・「沼田足入」も重要な軍事情報であった。



# 前田家略系図



か：加賀藩主  
 と：富山藩主  
 だ：大聖寺藩主  
 な：七日市藩主

数字は何代目を示す  
 人名は一部省略した

〔高德公遺誠〕

我等煩彌爾々無之候間、近々と存候。相果候はゞ長持に入金澤へ下し、野田山に塚をつかせ可被申候。則我等死骸と一度に、女ども加賀へ下し可被申候事。

一、孫四郎義金澤へ下し留守居に置、兄弟の人数大形壹萬六千程者可有之と存候。八千宛替らせ、大坂に詰させ、半分金澤に有之人数は、孫四郎下知に付候様に被申付、自然上方に申分出來、對秀頼様謀反仕候者候はゞ、八千之人数を孫四郎召連上洛仕、一手に罷成。さて金澤之留守居には、篠原出羽に又貴殿の内にてなじみ深き者を一人相添被置、殘人数孫四郎上洛仕、一手に罷成候様に仕置可然候。其上出羽事せがれより、我等側に召仕心持能存候。片口なる律義者にて候。城など預置候て能者に候。其上末森之時分、未若年に候へ共、手前殊之外能候間、我等姪婿にいたし候。關東陣之刻も、八王寺にて能候。然所に姪相果候付而、青山佐渡婿に可仕之由、女共屢申候間、跡にて如何様にもと申事に候。

一、其方子もなく、兄弟にも孫四郎計之義候間、利長に對し致非義間敷候。大納言同前に親とも兄とも可存候間、誓紙を爲書置候間進之候、可有御覽候。彌子とも弟とも思はれ、萬事形義も能成候様に異見被致度と存候事。

一、我等隱居知行之事、石川郡・河北郡・氷見郡、肥前守殿へ進之候。能州口郡壹萬五千石孫四郎へ遣之候事。

一、判金千枚、脇指三腰、刀五腰札を付置候間、孫四郎に遣之候。御渡可有之候。其外遺物に遣候金銀申置候ごとく可被遣候。其外一々日記にして不殘利長に進之候事。

一、金澤に有之候金銀諸道具、是又日記にして何も其方へ進之候也。然ば三年加州へ下申義無用に候。其内何とか埒明可申候事。

一、兄弟へ申置候。第一合戰の刻、敵の睥ぎりなりとも踏出し尤に存候。他國より被押込候ば、草葉の陰にても尤とは存間敷候。其故は信長公小人數之時分より、終に御國之内に而合戰被成たる事なし。敵國へ踏入、度々被得勝利候事。

一、奉公人之義は早廿年程召仕候者は、其家之作法能存候間、本座者同前に候。利家人數佐々内藏助と取合之刻、又は關東松枝・八王寺屢にいたし、又は乗崩し候時分も、新座者を聞及、過分之知行遣し呼寄候得ども、本座者を越事なし。我等家にも不限、信長公尾張一國御手に入候刻より、本座者新座に被越事なし。萬事に付て本座を捨る事可爲越度候。人には出來不出來はある者にて候。今日はや其方は三ヶ國之主に候間、萬事心持大事候。近所に依怙ひいき無之ものを、四五人も誓紙をさせ被召仕候て、外様なりとも家に久敷者をば聞立、呼出し被召仕候て、被見立、尤に候。其上新座者は、我身威勢之時は奉公仕者に候。自然手前惡き時分は、其身のかたつけを本として、結句表裏をいたすものにて候。又本座者は、日頃主人に對し不足を存候者にてても、左様之時分は其身の爲を存不遁者なり。此義は不及申候。信長公御遠行の刻、安土より其方内儀を引連被退候刻、路次にて本座・新座之覺可有之候。其

心持肝要に候事。

一、武道ばかりを本とする事有間鋪候。文武二道之侍稀なる間、分別位能者を見立聞立、加様之者は新座にても情を懸られ召仕、尤に候。我等も一代本座者に爲仕置、合戦之刻は先手をもさせ候へ共、終に越度取らず候。第一諸侍共身上成立候様に痛はり可被申候事。

一、長九郎左衛門・高山南坊世上をもせず、我等一人を守り、律義人に而候間、少宛茶代をも遣し、情を懸られ可然存候。片山伊賀事、主の身上より大氣を本と仕者候之間、自然の刻は謀反など心掛る事可有之候。言葉にての念頃の体被致、油斷有間鋪候。徳山五兵衛世上を致し、國主共と、我等影を持知人に成候由聞及候。然共我等存生之内は、悪心を企候而も、足の立處も有間敷候。主分別立なる者にて候間、時節を待在之候と見付候條、我等相果候はゞ、必表裏を企可申候間、左様之仕置尤存候。山崎長門事善者にて候。越中取合之刻も鳥越にて能候。然共意地惡敷かたくなしき武篇にて候間、侍三十か四十の頭は可然候。大なる大將は無用に候事。

一、村井豊後・奥村伊豫事、子供に家を渡し致隠居、今程は樂をさせ置候。然共我等相果候はゞ、彌情を懸けられ、髪をもそらせ不被申、祝儀などの刻も、此兩人家之老に候之間、被召仕尤候。其上大事之合戦の刻も、右兩人之者左様之事も仕付たる者候之間、人數千程宛預置候て、前後を爲守可被申候。伊豫一頃我等と中たがひにて致浪人在之候。越前義景陣之刻、はやき首を取參候間、其時我等召置候。其後佐々内藏助と取合之時分、末守之城を預置候へ共、手際よく持濟し、忠節致し候。關東陣之刻は彼等にも先陣を申付候處に、無越度仕濟候。豊後は江州金ヶ森と云處にて、佐久間玄蕃と一所に有合、一番乗を致し、其上能首を取、信長公へ懸御目候。大坂合戦之刻は、我等傍にて鎧を突、致手柄候。長篠合戦之刻は、我等目前にて致太刀打、名有者之首を取候。此義常々其方へも物語申候。越中佐々内藏助取合之時分は、末森後卷之先手をさせ、又は蓮之間焼之時分先手申付候處、貴殿も如被存知、度々致手柄、忠節他にことなる者候條、別而此兩人に情を被懸尤に存候。岡田長右衛門事、算用などさせ候而能奉公人に候間、主之分限に過候と貴殿も可被存候へ共、是もなじみの者に候間、隠居分に貳千石とらせ置候。但此者義、貴殿奉公振被見候而、目懸ぶりは其方分別次第に候。次に青山佐渡魚津を預置候。此者律義成者に而候間、彌情を被懸、尤に存候。神谷信濃方え宗半娘可遣かど、おしやう申候間、貴殿分別次第に候事。

右之條々心惡敷候得共、口上にては跡先忘候間、書付進之候。我等相果候ば、心持肝要に候間如斯候、以上。

慶長四年三月廿一日

羽柴肥前守殿

筑前利家判